マナビエ
MANABIE

記述の設計図　第4部 4つの型

U12　気持ち型(どんな気持ちか)

アドバンス

対象:高校2年・偏差値50

1. 要点(ルール)
2. 例題　小説「一分間」
3. 練習1・練習2(解答らんつき)
4. 解答と採点表

要点　気持ち型のルール

R12-1　心情＋契機
心情を問う設問でも、心情語だけでは得点にならない。心情を生んだ契機（きっかけ）を必ず添える。文末は「～気持ち。」「～心情。」（変化を問うなら「～ようになった。」）。

R12-2　言動が先・情景は確認
心情の根拠はまず言動（台詞・動作・表情）。情景描写は心情の確認・補強に使う。小説では、明るい日差しの中の緊張、冷たい雨の中の安堵のように、情景が心情と逆に置かれることもある。情景だけで心情を決めない。

R12-3　根拠のある心情だけを、すべて
心情は複数あり得る。本文に根拠のある心情はすべて書く。根拠のない心情・本文と矛盾する心情は得点にならず、減点の対象にもなる。要素表に根拠の段落を書いてから使う。

R12-4　自己への心情・他者への心情
自己に向かう心情（誇り・自責・悔恨・安堵）と、他者に向かう心情（感謝・負い目・気づかい・嫉妬）。両方向から探すと、片方の見落としを防げる。

R12-5　心情の変化＝4要素
変化前の心情とその理由・変化の契機・変化後の心情。傍線部に近い変化後から読む。「変化前は変化後の逆」は傾向であって規則ではないので、本文で確かめる。

R12-6　葛藤＝二つの「契機＋心情」
相反する心情AとBを、それぞれの理由とともに書き、逆接（～が、～）でつなぐ。どちらか一方に決めた、と本文にないのに書かない。

R12-7　言葉と内面のずれ
小説では、口で言うことと内面がずれる（強がり・気づかい・自分へのごまかし）。台詞をそのまま心情とせず、直後の動作・表情や語りの説明で内面を確かめる。

ルールの番号（R12-○）は、講座全体の通し番号です。動画・Webページ・このPDFで同じ番号を使っています。

例題　小説「一分間」

① 祖父が脳の病気で倒れてから、半年がたつ。命に別状はなかったが、言葉が思うように出てこなくなった。もともと話好きで、沙耶が小さいころは、夕飯のたびに昔の話をいくつも聞かせてくれた祖父だった。沙耶は週に一度、学校の帰りに祖父の部屋をたずねることにしている。

② 祖父は話しはじめると、途中で長く黙りこむ。沙耶はそのたびに「お茶のこと？」「テレビ、つける？」と先回りして言葉を補った。祖父は小さくうなずくが、そのあとは何も言わなくなる。うなずかれるたびに、沙耶は何かを取りちがえたような落ち着かなさを覚えた。沈黙が五秒も続くと、つい手元のスマートフォンに目を落としてしまう。

③ 「急がなくていいよ」と口では言いながら、沙耶は、自分がいちばん急いでいることに気づいていた。窓から差しこむ午後の日差しは明るく、部屋はあたたかかった。それなのに沙耶は、その部屋にいるあいだじゅう、肩に力が入ったままだった。

④ ある日、沙耶はスマートフォンを鞄にしまったまま、祖父の言葉を待ってみた。祖父は口を開きかけては閉じ、窓の外を見て、また沙耶を見た。一分ほどたっただろうか。祖父はゆっくりと言った。

⑤ 「さやの……字は、ばあさんに……似てきたな」

⑥ 沙耶は息をのんだ。机の上には、先週沙耶が書き置いていったメモがあった。祖父はそれを、何度も読み返していたらしい。亡くなった祖母のことを祖父が自分から話したのは、倒れてから初めてだった。

⑦ 帰り道、外は冷たい雨になっていた。けれど沙耶は、傘の中で、さっきの一分間のことを考えていた。あれは、何も起きていない時間ではなかった。祖父が言葉をさがし、思いが言葉の形になるまでの時間だったのだ。次は、もっと長く待ってみよう。沙耶は、そう思った。

問　――線部「次は、もっと長く待ってみよう」とあるが、ここに至るまでに沙耶の気持ちはどのように変化したか。百字以内で説明せよ。

解き方

1. **手順1　変化後から読む(⑦)**
   沈黙は「何も起きていない時間」ではなく、祖父の思いが言葉の形になるまでの時間だと気づいた→もっと待とうと思う(R12-5)。
2. **手順2　契機(④〜⑥)**
   先回りせずに待ってみたら、祖父が自分から亡き祖母の話をした。つながりテスト:「待ったら祖父が自分から語ったので、沈黙の意味に気づいた」→つながる。

3. **手順3　変化前(②③)と言葉のずれ**

沈黙に落ち着かず、先回りして言葉を補い、スマートフォンに目を落とす。「急がなくていいよ」は口だけで、内面は「いちばん急いでいる」(R12-7)。台詞を心情と取りちがえない。

4. **手順4　情景の罠**

③明るい日差し＝穏やか？→肩に力が入ったまま。⑦冷たい雨＝沈んだ気持ち？→待とうと前を向いている。この小説では、情景が心情と逆に置かれている(R12-2)。

5. **手順5　百字で組む**

変化前の理由(言葉が出ない祖父の沈黙)→変化前の心情(落ち着かず先回り)→契機→変化後(沈黙の意味に気づき、待とうと思う)。

要素表(材料を集める)

要素	中身	根拠	入れる？
変化後の心情	沈黙は思いが言葉になるまでの時間だと気づき、もっと待とうと思う	⑦	◎ 入れる
変化前の心情	沈黙に落ち着かず、先回りして言葉を補っていた(焦り)	②③	◎ 入れる
契機	待ってみたら、祖父が自分から亡き祖母の話をした	④⑤⑥	○ 入れる
情景	明るい日差し(③)／冷たい雨(⑦)＝心情と逆	③⑦	× 根拠にしない
根拠なし	祖父がかわいそう／祖父が元気になってうれしい	なし	× 入れない

模範解答

模範解答(百字以内)　96字／100字以内

言葉の出ない祖父の沈黙に落ち着かず先回りして言葉を補っていたが、黙って待つと祖父が自分から祖母の話をしたことで、沈黙は思いが言葉の形になるための時間だと気づき、もっと待とうと思うようになった。

参考:六十字以内なら　60字／60字以内

祖父の沈黙に落ち着かず先回りしていたが、待つと祖父が自分から語ったことで、沈黙の意味に気づき、待とうと思うようになった。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
変化後:沈黙は思いが言葉になる時間だと気づき、待とうと思う	4点
変化前:沈黙に落ち着かず、先回りして言葉を補っていた	3点
契機:待ってみたら、祖父が自分から祖母の話をした	2点
「〜が、〜ようになった」の変化の形・主述がねじれていない	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「明るい部屋で穏やかだったが、冷たい雨で沈んだ気持ちになった。」	情景だけで決めた。言動と逆。0点。
「急がなくていいと思っていたが、もっと待とうと思った。」	台詞をそのまま変化前の心情にした(内面は急いでいた)。変化前の3点が入らない。
「もっと待とうと思うようになった。」	変化後だけ。変化前・契機が無く、4点止まり。
「祖父が元気になってうれしくなった。」	本文に根拠が無い。0点。
百一字以上	字数超過。採点対象外になることが多い。

練習1　小説「賞状」

① 美術部の葵が出した油絵が、県のコンクールで入選した。高校に入って初めての入選だった。職員室で賞状を受け取ったとき、葵は胸の奥が熱くなるのを感じた。三か月、毎日のように放課後の美術室に残って描きつづけた絵だった。

② 葵と真帆は、一年生の春にいっしょに美術部に入った。ほかの部員から「二人で一枚」とからかわれるほど、いつもとなりにイーゼルを並べて描いてきた。コンクールの前の晩も、二人で最後まで残って仕上げをした。帰りの坂道で、「どっちかが入ったら、もう一人がおごるんだよ」と真帆は笑っていた。

③ 美術室にもどると、真帆がひとりで筆を洗っていた。真帆も同じコンクールに出していたが、名前は入選者の中になかった。真帆が葵よりも遅くまで美術室に残り、何枚も下絵を描き直していたことを、葵は知っている。

④ 「おめでとう。葵の絵、ほんとによかったもん」

⑤ 真帆は笑って言った。けれど、筆を洗う手は止まらなかった。水はとうに透きとおっているのに、真帆は同じ筆を何度もすすいでいた。

⑥ 「ありがとう」と言いかけて、葵は言葉をのみこんだ。喜びを口にすれば、それが真帆の耳にどう届くか、葵には想像できてしまった。かといって、喜んでいないふりをするのも、真帆の「よかった」という言葉にうそをつかせるようで、ちがう気がした。

⑦ 葵は、手にしていた賞状を、そっと鞄の奥にしまった。そして真帆のとなりに座り、だまって自分のパレットを洗いはじめた。窓の外では、運動部のかけ声が明るく響いていた。

⑧ しばらくして、真帆が小さく言った。「次は、わたしも入るから。また、となりで描いてね」。葵は顔を上げずに、うん、とだけ答えた。パレットの上で、洗い落とされた絵の具の色が、ゆっくりと水に溶けていった。

問　――線部「手にしていた賞状を、そっと鞄の奥にしまった」とあるが、このときの葵の気持ちを八十字以内で説明せよ。

① 要素表を書こう

要素(気持ち・きっかけ・変化前／変化後)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80

80字以内(1マスに1字。句読点も1字)

練習2　随筆(説明型)「手をにぎる」

① 高校生のころの私は、言葉で人を助けられると信じていた。落ちこんでいる友人がいれば、筋の通った励ましの言葉をさがし、相手が納得するまで話した。それが友人としての務めだと思っていた。うまく言えた日には、少し得意にさえなっていた。

② その信念がゆらいだのは、大学一年の冬である。幼なじみの遥が、事故で長く入院することになった。見舞いに向かう電車の中で、私は何を言うべきかを考えつづけた。「きっと良くなる」は無責任に思えた。「つらいね」は、彼女のつらさを私が知っているかのようで、口にできなかった。言葉を選べば選ぶほど、どれも彼女の前では軽すぎる気がした。

③ 病室に入ると、遥は窓の方を向いたまま、こちらを見なかった。私は用意したどの言葉も言えず、ベッドの横の椅子に座った。何も言えない自分が情けなく、来なければよかったとさえ思った。気がつくと私は、布団の上に出ていた遥の手を、ただにぎっていた。どれくらいそうしていたかは覚えていない。遥も、何も言わなかった。

④ 帰りの電車で、私は自分の無力さばかりを考えていた。せっかく見舞いに行ったのに、励ましの一つも言えなかった。窓の外を流れる町の明かりが、やけにまぶしく見えた。

⑤ 半年後、退院した遥と会ったとき、彼女は言った。「あのとき、何も言わないでいてくれたのが、いちばんうれしかった。励まされたら、こっちが元気なふりをしなきゃいけなかったから」。

⑥ 私は、あのとき言葉が足りなかったのではなかったのだと、そのとき初めて知った。言葉にしないまま相手のそばにいることも、たしかに相手に届く。あれは何も伝えられなかった時間ではなく、言葉とは別のしかたで伝えていた時間だったのである。今の私は、言葉が見つからないとき、それを恥じるのをやめた。

問　――線部「それを恥じるのをやめた」とあるが、ここに至るまでの筆者の気持ちの変化を、本文全体をふまえて百二十字以内で説明せよ。

① 要素表を書こう

要素(気持ち・きっかけ・変化前／変化後)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80
									90										100
									110										120

120字以内(1マスに1字。句読点も1字)

解答と採点表

練習1　小説「賞状」

解き方

1. **手順1　二方向から探す**
   自己への心情：①胸の奥が熱くなる＝入選がうれしい（三か月描きつづけた）。他者への心情：⑥喜びを口にすれば真帆にどう届くか＝真帆を傷つけたくない（R12-4）。

2. **手順2　台詞と内面のずれ（真帆）**
   ④「おめでとう」と笑うが、⑤同じ筆を何度もすすぐ＝悔しさをこらえている。葵はそれを読み取っている（R12-7）。

3. **手順3　葛藤として組む**
   喜びたい（A）が、真帆の前では喜びを見せられない（B）。⑥「喜んでいないふりをするのもちがう」＝どちらにも決めきれず、賞状をしまう（R12-6）。

4. **手順4　情景・根拠なしを外す**
   ⑦運動部の明るいかけ声は心情の根拠にしない。「真帆に勝ってほこらしい」は本文と矛盾。

要素表

要素	中身	根拠	入れる？
他者への心情（B）	真帆を傷つけたくない→喜びを表に出すのをためらう	⑥⑦	◎ 入れる
Bの理由	真帆は自分以上に努力したのに落選し、悔しさをこらえている	③⑤	◎ 入れる
自己への心情（A）	入選が素直にうれしい	①	○ 入れる
Aの理由	三か月描きつづけた絵が初めて入選した	①	○ 入れる
情景・根拠なし	運動部の明るいかけ声／真帆に勝ってほこらしい	⑦／なし	× 入れない

模範解答

模範解答（八十字以内）　73字／80字以内

描きつづけた絵の入選は素直にうれしいが、自分以上に努力して落選し悔しさをこらえる真帆の前で喜べば傷つけると思い、喜びを表に出すのをためらう気持ち。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
他者への心情:真帆を傷つけたくない・喜びを表に出すのをためらう(＋理由)	4点
自己への心情:入選が素直にうれしい(＋理由)	3点
真帆が悔しさをこらえていることを読み取っている	2点
「〜が、〜」でつなぐ・文末「〜気持ち。」	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「真帆に勝ってほこらしい気持ち。」	本文と矛盾(喜びをのみこんでいる)。0点。
「真帆の『おめでとう』がうれしい気持ち。」	台詞をそのまま受け取った。真帆の悔しさも葵のためらいも無い。1点程度。
「うれしい気持ち。」	片方だけ。3点。

練習2　随筆(説明型)「手をにぎる」

解き方

1. **手順1　変化後(⑥)**
   言葉にしないままそばにいることも相手に届くと知り、言葉が見つからない自分を恥じなくなった。
2. **手順2　契機(⑤)**
   遥の「何も言わないでいてくれたのが、いちばんうれしかった」。励まされたら元気なふりをしなければならなかった、という理由まで読む。
3. **手順3　変化前は二段(①〜④)**
   ①言葉で人を助けられると信じ、得意にさえなっていた→③④病室では何も言えない自分が情けない。「本文全体をふまえて」なので、①の信念から書く。
4. **手順4　具体的な場面を圧縮**
   電車の中で考えた言葉、窓の方を向く遥、手をにぎった場面は、そのまま並べず「入院した遥の前で何も言えなかった」とまとめる。随筆も小説と同じく、変化の4要素で組む(R12-5)。

要素表

要素	中身	根拠	入れる？
変化前①	言葉で人を助けられると信じていた	①	◎ 入れる
変化前②	入院した遥の前で何も言えない自分が情けない	②③④	◎ 入れる
契機	何も言わずにいてくれたのがいちばんうれしかったと遥に言われた	⑤	◎ 入れる
変化後	言葉にせずそばにいることも届くと知り、言葉が見つからない自分を恥じなくなった	⑥	◎ 入れる
具体的な場面	電車の中で考えた言葉／窓の方を向く遥	②③	× そのまま書かない

模範解答

模範解答（百二十字以内） 117字／120字以内

言葉で人を助けられると信じていたが、入院した遥の前では何も言えない自分を情けなく思った。しかし、何も言わずにいてくれたのがうれしかったと遥に言われ、言葉にせずそばにいることも相手に届くと知って、言葉が見つからない自分を恥じなくなった。

採点表

採点表（要素ごとの配点）	点
変化前：言葉で助けられると信じていた→何も言えない自分が情けない	3点
契機：何も言わずにいてくれたのがうれしかったと遥に言われた	3点
変化後：言葉にせずそばにいることも届くと知り、恥じなくなった	3点
文末が変化の形・具体的な場面をそのまま並べていない	1点
合計	**10点**

減点の型（こう書くと）	何点になる？ なぜ？
「電車の中で言葉を考えたが、病室では手をにぎった。」	場面を並べただけで、気持ちが無い。0点。
病室の場面だけ（「何も言えない自分が情けなかったが、恥じなくなった。」）	①の信念と契機が無い。本文全体をふまえていない。3点。
「言葉は役に立たないと失望した。」	本文と矛盾（言葉を否定したのではない）。0点。

マナビエ
MANABIE

記述の設計図　U12 気持ち型(アドバンス)

© MANABIE　無断転載・複製・改変・再配布を禁じます